『 被爆国だから、誇りと勇気をもって戦争放棄を続けてきた 』

２０１６年８月３１日　　中山　明俊

毎年８月は戦争を考えるスペシャルプログラムをＴＶ放映してくれる。いいきっかけをもらえるから、それでいろいろ考えることにしている。
今年の放映は、
①７月30日『 終戦スペシャルドラマ百合子さんの絵本 』と
②８月６日『 決断なき原爆投下　71年目の真実 』であった。
③９月３日『 ドラマ　戦艦武蔵 』

『百合子さんの絵本』は美しい薬師丸ひろ子が演じる小野寺百合子さんのスェーデン駐在武官の妻として、終戦直前の機密文書を日本へ打電する物語である。夫は小野寺信陸軍少将でヨーロッパ戦線の状況と連合国の動静を探って、日本の陸軍参謀本部へ情報を送る役目である。
百合子さんはそれを暗号文に翻訳し、日本へ打電する。大奮闘である。時には夫と言い争いになるが、けなげにも役目を全うする。
特に圧巻は、ドイツが降伏した後、ソ連は日本と開戦するヤルタの密約の情報を入手し、日本の参謀本部へ電報を送るが、「日本は米英との戦争終結、つまり講和の仲立ちをソ連に申し入れた」。百合子さんの送った情報を参謀本部は無視したのか、どこかで握り潰されたのか？　憤慨と落胆である。

数日してソ連は満州国境から攻め込んできた。
百合子さんは戦後、童話の『ムーミン』を翻訳する。

◆　　◆　　◆　　◆

今日の主題は②の『決断なき原爆投下』である。今年の調査で判明した真実で、トルーマンは原爆投下を決断していないというのである。
どうして？　ならば軍が暴走したのか？　それが明かされた。

私は以前から、アメリカ大統領トルーマンが日本へ原爆を落としたときどんな気持ちだったか聞きたいと思っていた。伝えられるところによると、

原子爆弾を落としたことによって「多くのアメリカ兵が命を失うのを原子爆弾投下によって救った」と言われている。しかしこれは公式発表みたいなもんで、その前に、「市民をこんなに殺していいのか」とか。
「これは大変なことをしてしまった」といった気持ちが動いたのではないか。つまり本音のようなところを聞きたいと思っていた。その疑問をどこかから聞けないかと思って、昨年８月１２日にこのホームページに投稿した。その疑問は今年のドキュメンタリではっきりした。
　今年のドキュメンタリでは、原爆開発責任者のグローブス准将が原爆開発計画の進捗状況と今後の進め方をトルーマン大統領に十分に説明しないうちに面会は終了ししてしまい。「大統領が「ゴーＧｏ」といっていない状況で、軍は原爆投下手順は承認された」と自分たちに都合よいように受け取ってしまった、というのである。
　それでも、トルーマン大統領は、「あくまでも軍事施設に投下する」枠ははめていたが、原爆開発責任者は「ヒロシマ」は軍事物資が集まる陸軍都市だと事実と違う報告を出していた。原爆計画の責任者は原爆投下の指令書に「徹底的に破壊しろ」と命令していた。
　原爆投下直後のヒロシマの写真を見て、トルーマンは友人宛の手紙で、次のように書いている。
　「日本の女性や子供たちに慈悲の気持ちは私にもある。人々を皆殺しにしたことを後悔している」
と。大統領トルーマンは長崎へ原爆投下後、３発目の投下を止めた。
　その後、トルーマン大統領はさらに最悪の悪手を指すことになる。
　それは、８月９日の長崎へ投下の２４時間後、国民へ向けたラジオ放送で、用意された原稿にはなかった、
「戦争を早く終わらせ、多くの米兵の命を救うため原爆投下を決断した」、と。
　ところがこれを、アメリカ国内の研究者はこの言葉が市民の頭上に投下した責任を追及されないために後付で考えられたものだと指摘している。
　しかも、不都合なのは、この後付の理屈であるものが、原爆投下の正当な理由付けとなって、今も、長くアメリカ国民が原爆投下を支持する根拠になっていることである。

原爆投下の話題に長く時間を割いてしまった。今日の論考の内容はまったく別のことだった。でも長い時間かをける必要もあった、これで原爆投下の経緯に決着をつけることができた。

今年５月オバマ大統領がヒロシマを訪問した。

１２月には安部総理が真珠湾へ行けばいい。

アメリカ国民も、「これ以上の命を失わないために原爆を落とした」とか、世界のリーダーたる国民の正当化論の過剰意識にこだわることなく、両国民の心からの率直なかかわり方を作り出したほうがいいのではないだろうか。

◆　◆　◆　◆

今日、書きたかったことは、安保法制とか「駆けつけ警護」なんて、安部総理は戦争体制整備を急いでいる。なぜ憲法改正をに焦点を当て、日本の戦争参加をしたがるのか。

一国の防衛をアメリカに任せて、「防衛只乗り論」に反論できない「後ろめたさ」を解消しようとしているのか。

その「後ろめたさ」を解消することよりも、「日本は戦争をしない国だと７１年間、武器を持って戦うことなく平和を維持してきたことの方が世界に与える影響は大きいのである。

その「誇りと勇気」を止めることの方が何倍も国際的に失望を買うことになる。

これまで日本は誇りと勇気を持って戦争放棄しても国家は繁栄できるという姿を世界に示してきた。これからも世界の先頭に立って戦わない日本を示していけば、世界には戦争をしたくない国がたくさん続いてくれる。その国も日本と同じように戦わない平和国家を勇気を持って宣言して、気がつけば世界から戦争がなくなったという事実つくりをしようじゃないか。

憲法９条はアメリカが作ってくれた憲法である。でも中身がよければそれを守ればいい。連合国がくれた憲法だから、アメリカは責任もって安全保障条約を守ってくれている。でも決して只乗りではない。相応の防衛負担は支払っている。

原爆が投下された慰霊祭の日にヒロシマ、ナガサキの市長は毎年「核廃絶を訴える」が世界の反響はまだまだ弱い。日本は勇気を持って戦争放棄した国を７１年守ってきた、被爆国民だからこそできたことだった。

その考えで戦争のない世界へ導いていきたいものである。

（終）